

らしっく

自分らしく、粋なくらし

2007.3
踏青号
Vol.17



まちづくり・生涯学習情報誌

らしっくは、自分らしく、
粋なくらしを目指す人たちを
応援する情報誌です。

市民活do P.4

- ・ NPO法人あおぞら子供神楽
- ・ ニノシマボタルを育てる里人の会

プラザ通信 P.5

らしっく情報の森 P.9

ひろしま八区
イベントガイド P.11

「踏青」とは、

春になって山野に出て、
青草を踏みながらそぞろ歩きを
することです。「らしっく」を読んで
市民活動という「フィールド」に
出掛けていってほしいという
思いを込めました。

P.1

特集／ビビッとしっくに

・ 観西オヤジの会

・ 美鈴が丘おやじの会 club-PAPAS



力仕事はオヤジの番。すごいスピードで組み上がっていきます

知らない人ばかり「だったそうです。しかし、オヤジの会の活動をするにしたい、仲間が増えてきました。色々話せる仲間ができて、地域のひと話することも増えたそうです。」「それまでは、自分の子どもだけを見ていましたが、最近は地域の子も全員が見えるようになりました。子どもの友達の顔と名前が一致するようになり、顔見知りの大人も増えました。視野が広がった気がします」と増田さん。たとえ子どもが小学校を卒業しても、自分が「地域のオヤジ」であることに変わりはないため、時間がとれる限り活動が続けていく予定だそうです。

一大イベント「とんど祭り」

これまで学校行事と言えば、母親が中心となって運営していましたが、吉村さんたち「オヤジの会」は、オヤジによるオヤジパワーを



オヤジの会&乙女会による餅つきもありました

観西オヤジの会

URL
<http://www.kannishioyazi.org/>

「男手がある」と、こんなこともできるのね」と非常に好評。とんど祭りは地域の人もからも喜ばれ、オヤジの会のメインイベントとなりました。

1月13日(土)、今年で5回目となるとんど祭りの準備が行われました。とんどの「はかま」の部分に必要な竹は、地域の地主さんから提供してもらっています。学校の先生も加わり、テキパキと作業が進められました。4年生の担任で創立当初からのメンバーである本計先生は、「最近の子どもは、

父親が活躍する場を見ることが少ない。お父さんが頑張っているところを見せるのは教育的にもいいし、子どもたちを地域で育ててもらえるのは学校としても非常に心強い」と話します。

翌日は朝11時から、お正月のお飾りや書き初めなどを手にした地域の人が集まりました。今年は、地元の高校である五日市高校書道部も参加。書き初めを披露し、喝さいをあびていました。いずれは大学生も巻き込み、地域の輪をもっと広げていきたいそうです。児童館やスポーツ少年団、地域のボランティアグループによる屋台も出店。もちろん、オヤジの会も屋台を出し、餅つきも行いました。

とんどに並ぶもう一つの一大イベントが、夏休みに開催される、「学校に泊まる」です。体育館にテントを張って泊まり、自分で食事の支度をするキャンプのような行事は、子どもたちに大人気。地域の人の協力もあり、毎年

200人近い参加があるそうです。

地域のひとと協力しながら、子どもたちを見守る

観音台は坂が多いため、買い物などの外出は車が中心です。しかし子どもたちの移動手段は徒歩。大人が子どもと同じ道を歩くことが少ないため、危険箇所に気付かないこともあります。そこでオヤジの会では、通学路の安全チェックも行っています。ガードレールが朽ちていたり、カーブミラーが曲がっていたり、歩かないと分からない場所を注意して安全を確認しています。

本業である仕事も頑張りながら、地域のひととして頑張るオヤジたち。みんなで協力し、何より自分も楽しみながら、オヤジパワーを発揮しています。



オヤジの会会長の吉村浩宣さん



点火と同時に一気に燃え上がる姿は非常に迫力があり、拍手がわきました

母親まかせを卒業しよう

観西オヤジの会結成のきっかけになったのは、一枚の新聞記事でした。5年前の秋、同じ広島市佐伯区の八幡東と美鈴が丘で、「おやじの会」が頑張っているという記事が紹介されたのです。それを読んだ吉村浩宣さんは、「これは面白い！うちでもやりたい！」と感じたそうです。PTA会長と地元の小学校である五日市観音西小学校に協力を依頼したところ、ぜひ一緒に頑張ろうと一致団結。オヤジがメインで活動すること、で、「お母さん」とは違った関わりを持とうと、平成14年(2002年)11月に、メンバー13人で会が誕生しました。会長は、呼びかけ人である吉村さん。「観音台に住むようになって10年たちます

が、地域と関わることはほとんどありませんでした。地域と交流する機会もなく、顔見知りも少なかったです。しかし活動をするようになって、地域で顔見知りができるようになりました。オヤジ仲間もできましたし、飲み友達もできたんです」と語ります。

地域との関わりがたが変った

現在オヤジの会のメンバーは約60人。入会条件は、「地域のオヤジであること」のみ。現在は20代後半から70代までの会員があり、約半数は子どもがすでに小学校を卒業しているオヤジたちです。3年前に入会した増田さんは、2児の父親です。PTA会長に誘われて入会するまでは、地域のひととの交流はまったくなく「顔も名前も



とんどの「はかま作り」には、子どもたちも手伝いにやって来ました



ビビツとアンテナを張り巡らせている人は、いつもvividにイキイキと生きています。そんな方々のchic(粋)な活動をご紹介しますこのコーナー。

さあ、あなたもビビツと、しづくに暮らしてみませんか？

PTAと学校とオヤジと地域が タッグを組んで子どもたちを育てていく

観西オヤジの会

子どもは地域が育てるもの。そんな考え方が浸透し始めています。今まで「学校」「子ども」と言えば、お母さんが出番というイメージがありました。しかし地域全体で子どもたちを見守っていくためには、お父さんの活躍も必要不可欠です。なかなか地域の中で活動する時間が取りにくいお父さんたちですが、「自分のできる範囲で」「自分も楽しみながら」頑張っています。今回は、そんな「頑張るオヤジたち」を紹介します。

地域が育てば子どもも育つ 頼れるサポート役・架け橋として

美鈴が丘おやじの会

クラブ PAPAS

父親の姿をみせるために

佐伯区的美鈴が丘おやじの会「club-PAPAS」が結成されたのは平成11年（1999年）、校内暴力や不登校がクローズアップされるようになった時期です。当時の美鈴が丘中学校PTA執行部のメンバーたちが子どもたちに、父親の姿を積極的に見せていこう」と提案。保護者たちに呼びかけ、5、6人のお父さんが集まりました。結成当初は、メンバー同士の親交を深める飲み会などの活動が中心。徐々に具体的なプランを組み立てていき活動が本格化しました。当時は週休2日制でなかったこともあり、土曜日の午後には中学校を訪れ、先生や生徒たちと廊下のワックスがけや窓ふき、側溝の掃除などを行いました。

昨年から会の代表を務める島田孝一郎さんは、会のコンセプトとして「調和」を掲げています。「小・中学校の先生や生徒、親御さん、地域の人々のサポート役、架け橋としての役割を果たしたいんです」。島田さんは、地域の各学校のPTAで結成されたソフトボールリーグの代表者でもあります。時にはソフトのメンバーにおやじの会への参加を勧めることも。「どの団体であれ、同じ美鈴が丘の住民に変わりはない。地域全体でいい流れを作れば、と思

っています。ただ、地域を思う気持ちは同じでも、その思いをまとめるのは決して容易ではありません。会の動きを小学校にまで広げるにあたっては、小学校と中学校では子どもたちに年齢差があること、前例がないことなどが懸念され、学校側と何度も議論を重ねた末、実現に至ったという経緯があります。その一方で、昨年、美鈴が丘の幼稚園にもおやじの会が結成されるなど、会の地域への思いが周囲の人々にも広がりを見せた、うれしい出来事も起こっています。また、島田さんは「メンバーそれぞれに仕事も家庭もあるからこそ、だれが抜けてもお互いを支え合えるようにしたいです。」役割が終わったら知らないではいけません。会の活動の流れが絶えることなく受け継がれていってほしいです」と、引き継ぎの際にも強い結束力が必要だと語りました。ますます広がりそうな「おやじの背中」。子どもたちにも地域にも、頼もしい存在です。

家族ぐるみで、わきあいあいと

NPO法人あおぞら子供神楽

古くから伝わる伝統芸能である神楽。広島県では特に盛んで、県内各地に神楽団が点在します。「NPO法人あおぞら子供神楽」もその一つ。昨年の10月11日にNPO法人の認証を受けたばかりの、新しい神楽団です。活動が始まったのは、平成14年（2002年）のこと。川内地区に住む小学生が、「神楽をやりたい」と言い始めたのがきっかけでした。神楽団の代表を務めるのは、安芸高田市高宮町出身の池原さん。自ら神楽団で活動していることもあり、「子どもたちに神楽を教えよう」と、指導を引き受けました。台詞回しを現代風にしたり、舞を簡単にアレンジするなど、親しみやすく覚えやすいように工夫をしたそうです。

から、私もやりたい」と神楽を始める子ども多いのだとか。レパートリーは、「八又大蛇」「悪狐伝」「紅葉狩」の3曲。病院や介護福祉施設、地域のイベントなどと呼ばれ、神楽を披露しています。「子どもたちが一生懸命やっているのを見ると、もっと教えてあげたい。今後はレパートリーを増やし、楽も教えていきたい」と池原さん。昔のことを学び、神楽を習いたいと思う子どもたちを、地域の大人が支えています。



ただ今団員募集中。詳しくは10ページの募集コーナーをご覧ください

広島市内で神楽に取り組む子どもたちの神楽団「NPO法人あおぞら子供神楽」(安佐南区)と、ニノシマボタルの保護と育成を行う「ニノシマボタルを育てる里人の会」(南区)を紹介します。

6月にはニノシマボタルの観察会を行います。詳しくは9ページのイベントコーナーをご覧ください



現在のメンバーは、約30人で、似島中学校や似島公民館も協力してくれています。里人の会では似島在住の方や、自然を愛するボランティアを広く募集しています。

今話題の市民活動を
紹介するこのコーナー。
その活動の原動力は
人生を楽しむ気持ちと
人に何かを与えることの
喜びでした。
さあ、あなたも市民活動を
始めてみませんか？

shimin
katsu do



市民活
do

自然と人との共存共栄

ニノシマボタルを育てる里人の会

ニノシマボタルとは、広島市南区似島に生息するホタルのこと。基本的にはヘイケボタルなのですが、本土のヘイケボタルとは若干異なる進化をしています。このホタルに注目が集まったのは、3年前。似島の人から「最近ホタルを見なくなった」という嘆きが聞かれたのです。南区役所区政振興課が実態調査を行ったところ、ニノシマボタルの存在が期待できることが分かりました。そこでボランティアを募り、「ニノシマボタルを復活させよう」という活動が始

まりました。ホタルの生息には、湿地帯と草むらが必要で、そこでホタルが生息しているような似島地区の休耕田を借り、ホタルの住みやすい環境になるように整備しました。休耕田の一部は竹藪になっていたのですが、まず竹や草を刈り取り、畦を作っていきます。草むらは、高すぎても低すぎてもダメ。広島市森林公園から専門家を招き、指導を受けながら作業をしました。里人の会代表である宮本輝昭さんは、休耕田には、ホタルの幼虫の天敵であるヤゴがたくさんいました。でもホタルのためにはヤゴを駆除するのではなく、本末転倒。ホタルの住むことができる環境を守り、維持し続けるのが、私たちの活動の目標です」と語ります。活動の結果、昨年の夏は120匹ほどのホタルの乱舞を見ることができました。



小学校のイベント「あつまれ美鈴っ子」。校庭で、芋を焼く準備をする会のメンバーたち(右)「club-PAPAS」のメンバーとしても活躍する、PTAソフトのメンバーたち。地域への思いが結んだ絆です(中央上)市民が参加する「ふれあい音楽祭」では、白線を引いて駐車スペースを整理(中央下)中学校の「ふれあいフェスタ」ではお母さん方の協力も受けながら、焼きそばを販売(左上)「club-PAPAS」の帽子をかぶり気合いの入る、島田孝一郎さん(左下)

美鈴が丘おやじの会
club-PAPAS

URL <http://misuzu-town.net/oyaji/>